

只見短歌会

六月詠草

大塚栄一

指導

うどやわらび次つぎ届く春の味友の真心も共に頂く

馬場 八智

老人会のいきいきサロンの集いあり令和元年交流感謝

関谷登美子

雨跡の根もあらわなる花々に土あつく寄せ片向き押しさふ

目黒 富子

孫に買ひし玩具仔猫はよろこびて孫よりながくもて遊びゐる

新国由紀子

客の声返事のみして足腰の痛みに容易に立つ事ならず

渡部ゆき子

梅雨明けが長引く雨に草も伸び晴れ間に野菜の土を落とさむ

渡部ヨリ子

雷雨の中花の仕入れに行きし孫の帰り来るまで心安まらず

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

七月定例会

目黒十一

指導

新茶とて涯下の清水汲みに行き
半ズボン履きて農婦の白き脛

一穂

入梅や待ち合ひ室の生あくび
夏の風頬に触るや曲り行く

修一

吊り橋に湯火照り冷ます影おぼろ
予報見て「もつての外」菊根分け

吉児

夕立の時には恋し遠き峰
大夕立ダム湖に桴を叩きつけ

幸生

紫陽花に道教えられ寺巡り
梅雨晴れや水面に映る子ども

信

泥んこの手にはオモチヤ軒菖蒲
梅雨晴れや連絡待ってスボ少の子

都

予後の夫ひと足づつの溽暑かな
倒木をびっしり覆ひ苔青し

味代子

老鶯や真似て掛け合う夫の声
山清水笹の葉に汲み妣を恋う

弘子

涼風や事務執るペンのなめらかに
ほととぎす雨後の校舎のしずまれり

一恵

一握の刈葱しきりとほととぎす
味噌の香も小出しの甕へ薄暑かな

礼